

『骨のうたう』

2022年07月25日

玉川大学教授の小林察氏が『骨のうたう〈芸術の子〉竹内浩三』を上梓している。まず、竹内浩三の『骨のうたう』を転載したい。

〈戦死やあはれ / 兵隊のしぬるやあはれ / とほい他国でひょんと死ぬるや
だまってだれもゐないところで / ひょんと死ぬるや / ふるさとの風や
こひびとの眼や / ひょんと消ゆるや / 国のため / 大君のため
死んでしまふや / その心や / 昔いちらしや あはれや兵隊の死ぬるや
こらへきれないさびしさや / なかず 咆えず ひたすら 銃を持つ
白い箱にて 故国をながめる / 音もなく なんにもない 骨
帰っては きましたけれど / 故国の人によそよそしさや
自分の事務や 女のみだしなみが大切に / 骨を愛する人もなし
骨は骨として 勲章をもらい / 高く崇められ ほまれは高し
なれど 骨は骨 骨は聞きたかった / 絶大な愛情のひびきを 聞きたかった
それはなかった / がらがらどんどんと事務と常識が流れてゐた
骨は骨として崇められた / 骨はチンチン音を立てて粉になった
ああ 戦死やあはれ / 故国の風は骨を吹きとぼした
故国は発展にいそがしかった / 女は化粧にいそがしかった
なんにもないところで / 骨はなんにもなしになった〉

竹内浩三は1921年、三重県宇治山田市で生まれた。子どもの頃から、言葉に対して深い関心を持ち、優れた感性で、世相を風刺したマンガや詩や文章を書いていた。青年期、映画を作ることを夢見て、日本大学専門部（現芸術学部）に入学する。しかし時代は、戦争に向かってまっしぐらに進んでいた。繰上げ卒業で、召集される。1943年、茨城県西筑波飛行場の滑空部隊に転属し、過酷な訓練を受ける。その間、毎日、トイレの暗い電球の下で、詩や文章を書き続け、書いたノートを、本をくり抜き、そこに隠して姉に送る。1945年、フィリピンのルソン島の戦闘において戦死する。24歳に満たない、短い命を失う。

『骨のうたう』で歌われた通りの人生を終えた。姉の所に残されたノートや、教科書の書き込みや、本の中に挟まれた紙片から、詩や文章が奇跡的に発見される。それらを読んだ人に衝撃を与え、幾たびも、全集が刊行されている。

学生時代に『日本が見えない』という詩を書いている。

〈日本よ / オレの国よ / オレにはお前が見えない
一体オレは本当に日本に帰ってきているのか / なんにもみえない
オレの日本はなくなった / オレの日本がみえない〉

『骨のうたう』『日本が見えない』は、二十歳過ぎの青年が書いた詩とは思えない。戦死した自分を見つめ、骨になって帰国し、その骨は、戦争に邁進する日本では、ほまれ高しと勲章をもらう。しかし、自分は何にもなしになった、自分の国はなくなった、と詠じ、敗戦後の日本の姿を先取り視している。研ぎ澄まされた感性と時を見る目の鋭さに魅了される。読みながら「無言館」を思い出した。画家を目指した若者が戦争に駆り出され、残された時間を惜しみ、恋人や家族を描いた絵画を展示した無言館では、無言でしか観られない。戦争は、才能ある若者の命を無残に奪った。竹内浩三は、「戦争は悪の豪華版である」と見抜くが、それは真実である。